SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

「伝統的工芸品」を対象とした大学生の意識調査：教員養成課程の大学生の結果に着目して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-12-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 髙橋, 智子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00028491

「伝統的工芸品」を対象とした大学生の意識調査

－教員養成課程の大学生の結果に着目して－

An Investigation of University Students' Understanding of Traditional Crafts
: Focusing on Students in the Teacher Training Course

髙橋　智子[1]
Tomoko TAKAHASHI

（令和 3 年 11 月 30 日受理）

要旨

本稿は、前報[1]で報告した「伝統的工芸品」を対象とした大学生の意識調査において、教員養成課程に在籍する大学生に焦点を当て、伝統的な工芸品に対する知識や興味関心等の現状と課題の傾向をさらに分析することを目的とする。前報[1]の分析結果との共通点や相違点を考察し、教員養成課程における伝統や文化の学習の在り方を検討する一助とする。

１．はじめに

近年、学校教育において、伝統と文化を尊重し、我が国の伝統と文化を基盤として国際社会を生きる日本人の育成等が求められている。こうした現状の中、文化庁が実施した調査結果では、高校生以下の伝統文化（文化芸術）への興味関心の低さが示されており[2]、その学習の在り方には課題が多いといえる。平成 29 年には、学習指導要領が改訂され、国内の造形・美術教育の在り方を再検討する動きが顕著になっている。こうした状況下において、児童生徒の伝統や文化の学びに関して、造形・美術教育での学習の在り方が問われている。

２．研究目的

本研究の目的は、造形・美術教育における伝統や文化の学習の在り方を探ることである。前報[1]では、大学生 882 名を対象に実施した「伝統的工芸品」に対する意識調査をもとに、大学生の伝統的な工芸に対する知識や興味関心等の現状と課題を分析した。加えて、造形・美術教育における伝統や文化の学習の在り方の検討に向けて重要となる３つの視点を提示した[3]。

本稿では、前報[1]の調査対象（大学生：882 名）の内、教員養成課程に在籍する大学生（359 名）に焦点を当て、伝統的な工芸に対する知識や興味関心等の現状と課題の傾向をさらに分析することを目的とする。調査対象を教員養成課程の大学生に絞り結果を分析することで、教員養成課程に在籍する大学生の伝統的な工芸に対する知識や興味関心等の実態を明らかにする。

---

[1] 美術教育系列

前報[1]の分析結果との共通点や相違点を考察することで、教員養成課程における伝統や文化の学習の在り方を検討する一助としたい。

３．調査時期及び方法

本アンケート調査は、2018 年９月～2019 年３月に実施し、調査方法は自記式質問紙とした（有効回収率・回答率 100％：ｎ＝882）。また、質問紙に加えて「伝統的工芸品」の一覧表（計 230 品目、平成 29 年 11 月現在）を作成し別紙として付けた[4]。調査対象は、福岡県のＡ大学（１校）と静岡県のＢ大学（１校）の大学生とした。Ａ大学は、芸術学部、経営学部、工学部の大学生を対象とし、Ｂ大学は教育学部の大学生（以下、学部生と記す）を対象とした。本稿では、Ｂ大学の学部生（n＝359）を調査対象とする。なお、男女比は考慮せず集計を行った。

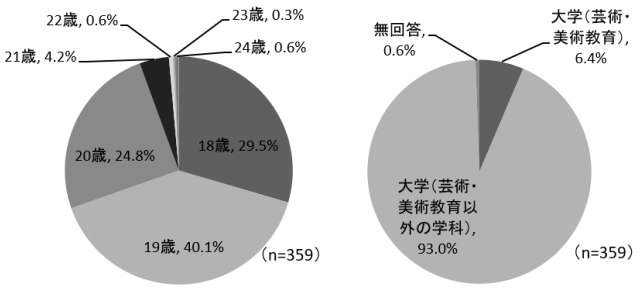
４．調査内容

調査では、問題の所在や研究目的を踏まえ、「使い手」の視点から大学生の「伝統的工芸品」に対する知識や興味関心等を問う質問項目を設定した[5]。

５．結果

（１）属性

回答者の属性は、図１の通りである。18 歳から 21 歳が回答者の 98％以上を占めた。美術教育専修の学生が 6.4％、それ以外の学生は 93.6％であった。学部生の出身地は、表１の通りである。静岡県が 245 名と最も多く、次いで愛知県が 26 名となっている。大半の学部生の出身地は、東海の各県という結果となった。



18 歳:106 名、19 歳:144 名、20 歳:89 名、21 歳:15 名、22 歳:2 名、23 歳:1 名、24 歳:2 名（計 359 名）

大学（芸術・美術教育）：23 名、大学（芸術・美術教育以外の学科）：334 名、無回答：2 名

図１　属性について　年齢（左図）及び所属（右図）

表１　出身地

都道府県	人数
静岡県	245名
愛知県	26名
長野県、岐阜県	各8名
山梨県	7名
神奈川県、福井県、三重県、兵庫県	各5名
北海道、千葉県	各4名
栃木県、富山県、大阪府、島根県、広島県、徳島県	各3名
新潟県、滋賀県、京都府、鳥取県、愛媛県	各2名
岩手県、宮城県、福島県、茨城県、埼玉県、石川県、香川県、福岡県、沖縄県	各1名

（２）知識等について

１）「知っている伝統的工芸品」について

「知っている伝統的工芸品」の分野として、最も認知度が高かったのは「陶磁器（84.7％）」であり、次いで「染織品（75.5％）」、「漆器（71.9％）」、「人形・こけし（70.8％）」、「和紙（58.8％）」であった（図２）。上位には「陶磁器」や「染織品」、「漆器」等が挙げられた。この傾向は、前報[1]で報告した全体（以下、全体と記す）の傾向と同様であり、「陶磁器」や「染織品」、「漆器」は、食文化及び衣文化との関連も深いため、生活の中で使用したり、販売されているものを目

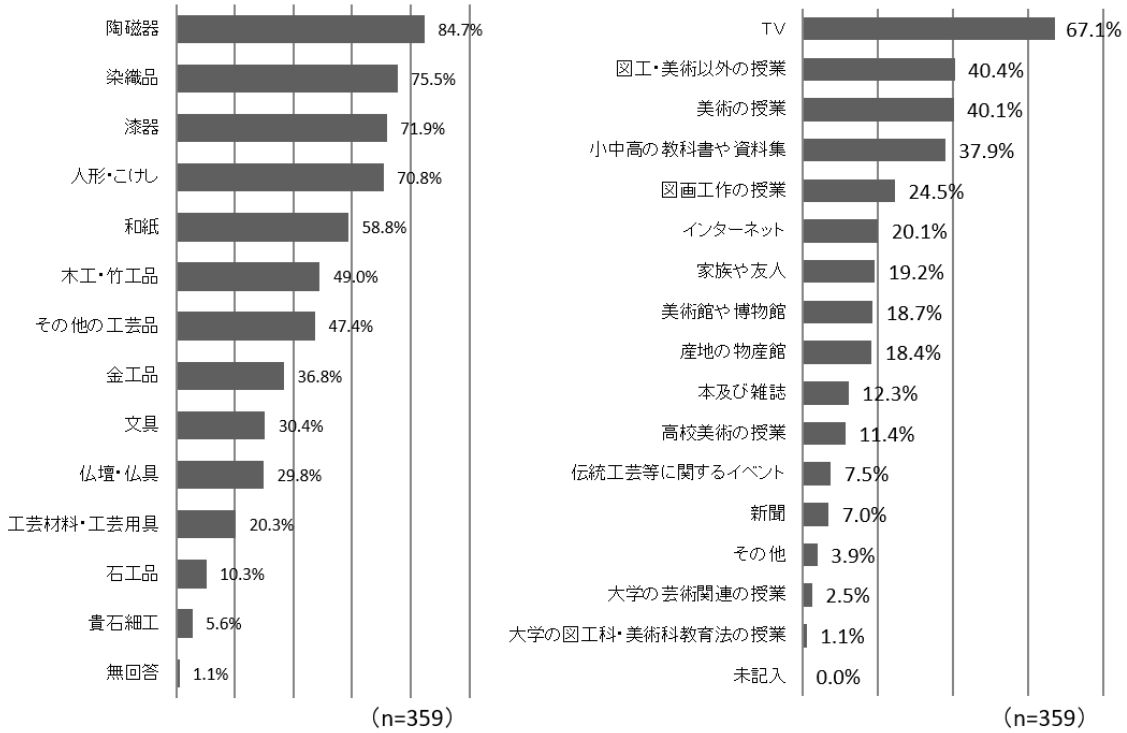


図２　「知っているもの(左図)」及び「知った方法（右図)」: 複数回答

にしたりする機会が多く、学部生にとっても身近なものだと考えられる。さらに、本学部では家庭科に関連する科目において、衣食文化を扱っている内容が設定されているため、全体と比較した時に「陶磁器」、「染織品」、「漆器」の認知度がより高いと考えられる。

２）「伝統的工芸品を知った方法」について

「伝統的工芸品を知った方法」については、「TV（67.1%)」が最も高く、次いで「図工・美術以外の授業（40.4%)」、「美術の授業（40.1%)」、「小中高の教科書や資料集（37.9%)」という結果になった（図２)。学校教育においては、図工・美術以外の授業と美術の授業が高い値を示し、美術科以外の教科では社会科（校種は問わない：86.2%）となった。この傾向も、全体と同様であり、「伝統的工芸品」の情報源としては、TV や学校教育での学びの機会（社会科や美術科等）が大きく影響しているという結果となった。この結果から、学部生においても、伝統的な工芸について学ぶ機会を設けることの重要性が示唆されたといえる。さらに、「小中高の教科書や資料集」については、全体[6]よりも高い値を示しているとともに、教科の授業と教科書や資料集の値にあまり差がないため、授業内容と合わせて教科書や資料等の教具活用の重要性を示唆する結果となった。

３）「伝統的工芸品の魅力」について

「伝統的工芸品」に対して、「とても魅力を感じる」と回答した学部生は 13.1%であり、次いで「魅力を感じる(66.6%)」、「あまり魅力を感じない(14.8%)」、「全く魅力を感じない(0.6%)」

と続いた。「伝統的工芸品」に対して「とても魅力を感じる」と「魅力を感じる」の合計が 80%に近い値となり、約８割の学部生が「伝統的工芸品」に対して魅力を感じているという結果となった。この結果は全体と同じ傾向であったが、全体と比較して「とても魅力を感じる」と回答している学部生が若干ではあるが低い値を示している。全体でも、「あまり魅力を感じない」、「全く魅力を感じない」と回答している大学生（16.5%）もいたが、学部生に注目した場合にも、「伝統的工芸品」に「あまり魅力を感じない」、「全く魅力を感じない」と回答している学部生（15.4%）がおり、その値に大きな差はないという結果となった。

４）「伝統的工芸品で重視する視点」について

「伝統的工芸品」に対して 13 項目の視点を示し、その項目をどの程度重視するか（評価）について質問した。評価が高かったのは、「文化的な価値を感じる（59.1%）」、「デザインがよい（56.3%）」、「品質がよい（55.7%）」、「歴史的な価値を感じる（54.6%）」、「技法に魅力を感じる（51.3%）」であった（図３）。評価が低かったのは、「使用方法が分かりやすい（9.7%）」、「優越感を感じる（13.9%）」、「機能性が高い（16.2%）」、「維持管理がしやすい（18.4%）」、「購入しやすい価格（19.5%）」であった[7]。全体では、「重視する視点」として「使い手」として「自分にとっての使いやすさ」（デザイン性や品質等）や「工芸品の背景に込められた普遍的な価値」（文化的・歴史的な価値等）の両面があることが明らかになっている。学部生においても、同様の傾向が見られた。ただし、最も値が高かったのが「文化的な価値を感じる」であったため、学部生においては「工芸品の背景に込められた普遍的な価値」をより重視している結果となった。また、５割を超えた回答には、「技法に魅力を感じる」も入っており、全体と比べて、「使い手」として「自分にとっての使いやすさ」（デザイン性や品質等）や「工芸品の背景に込められた普遍的な価値」（文化的・歴史的な価値等）の両面に加えて、「技法」を重視する結果となった。つまり、より幅広い視点から伝統的工芸品を価値づけていることが示された。

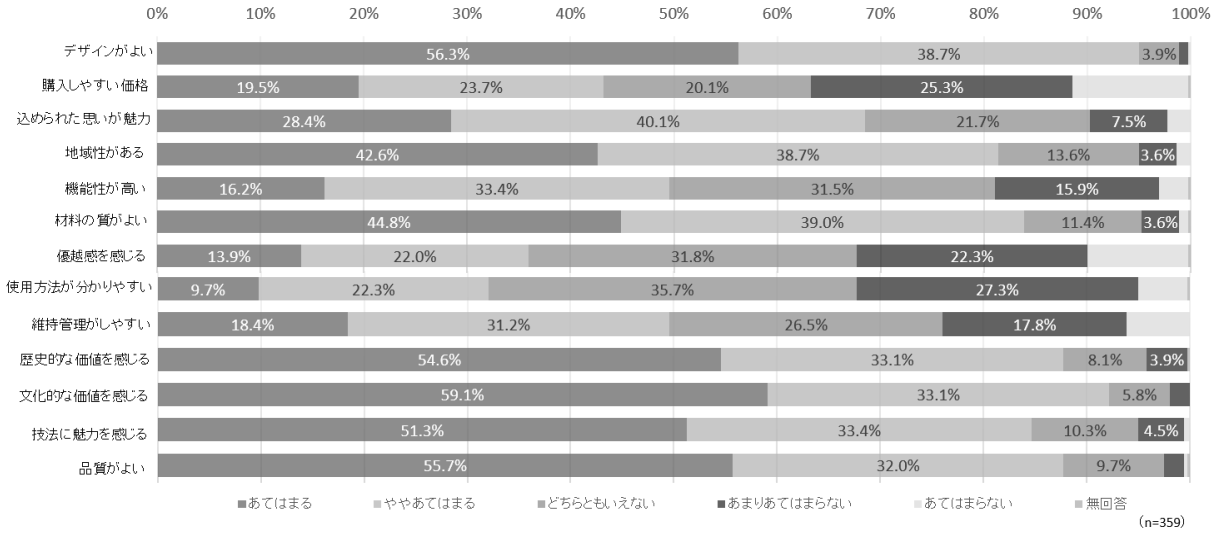


図３　伝統的工芸品について重視する視点

５）「実際に見たことのある伝統的工芸品」について

「実際に見たことのある伝統的工芸品」（図４）については、最も高い値は「陶磁器（44.0%）」となり、次いで「染織品（41.2%）」、「人形・こけし（37.0%）」、「漆器（34.0%）」、「和紙（28.7%）」となった。全体と同様に、知っているもの（図１）と上位の５品が同じ結果となった。これも全体と同様に、「知っていること」と「実際に見た経験」について関連性があると推察される。

６）「伝統的工芸品の使用経験」について

使用経験（使う、着る、飾る等）を質問した結果、「無回答（使用したことがない）（41.2%）」が最も高い値であり、次いで「陶磁器（19.5%）」、「和紙（16.4%）」、「染織品（15.9%）」、「漆器（13.9%）」と続いた（図４）。全体の結果において、「伝統的工芸品」を使用したことのない大学生がもっとも多かった（37.4%）が、学部生においても同様の結果であった。ただし、全体と比較した際、学部生の方が「無回答（使用したことがない）」と回答している値が高く、「伝統的工芸品」の使用経験の少なさが示された。加えて、他の「伝統的工芸品」の使用についても、全体と比べ、低い値が示されていたため、全体的に「伝統的工芸品」の使用経験が少ない傾向となった。使用したことのあるものは、図２と同様に衣食文化との関連が深いことが示され、「実際に使用すること」と「実際に見たことのあるもの」、「知っていること」との間には、関連があると推察できる[8]。

７）「生まれ育った地域の伝統的工芸品」について

「自分の生まれ育った地域の伝統的工芸品」について、「知っている」と回答したのは27.3%で「知らない」と回答したのは60.7%となった（無回答：12.0%）。６割以上の学部生が生まれ

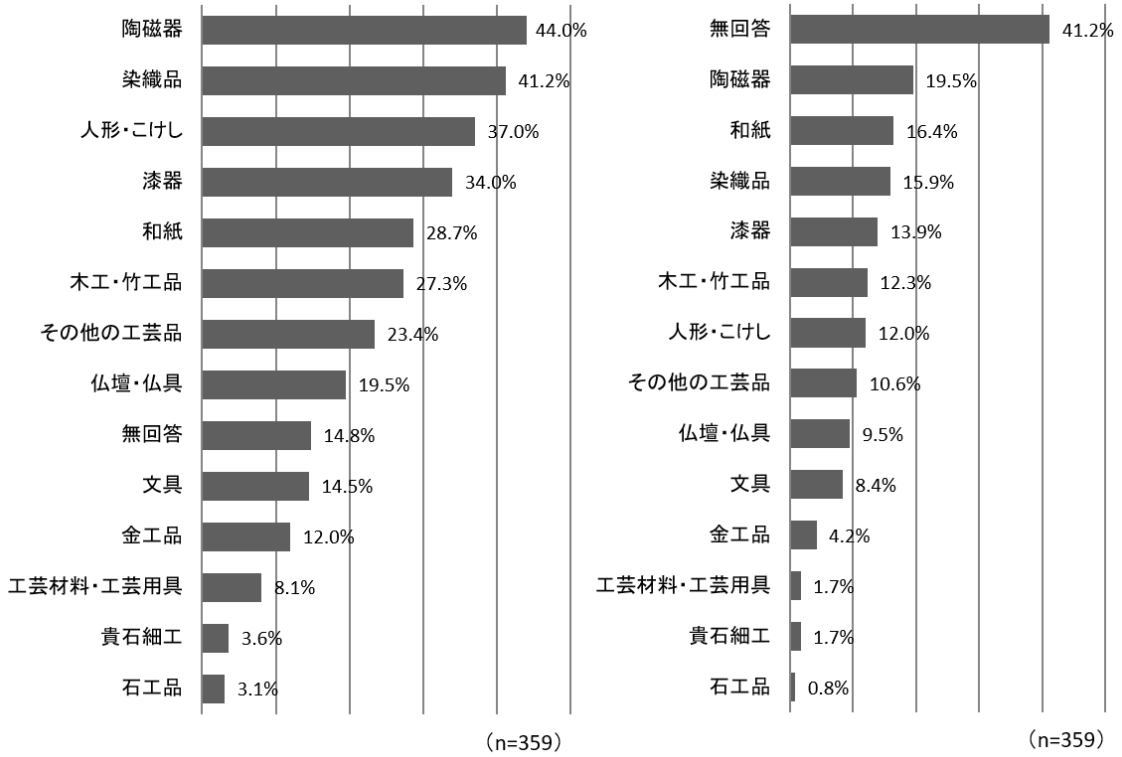


図４「見たことのあるもの（左図）」及び「使用したことのあるもの（右図）」：複数回答

育った地域の伝統的工芸品について把握していないという結果となった。多くの学部生の出身地である東海の各県にも、豊かな伝統的工芸品が生産されている。しかし、学部生の結果では、全体と比較して、「知っている」という回答が減少し、「知らない」という回答が増加する結果となった。

（３）興味関心について

１）「実物を見てみたいもの」について

「実物を見てみたいもの」として、「染織品（43.7%）」が最も高い値を示し、次いで「貴石細工（34.8%）」、「漆器（32.9%）」、「和紙（29.0%）」、「陶磁器（28.7%）」、「金工品（27.3%）」となった（図５）。これまで上位に挙がっていなかった「貴石細工」や「金工品」が上位に挙がっているのは、全体と同じ傾向であった。「実際に見てみたいもの」として興味を示したのは、既に「知識として知っているもの」だけではなく、学部生においても「知らないもの」（貴石細工や金工品等）に対しても同様に興味を示す結果となった。

２）「学んでみたいもの」について

「学んでみたいもの」として、「染織品（46.2%）」が最も高い値を示し、次いで「漆器（30.4%）」、「和紙（28.4%）」、「陶磁器（27.6%）」、「木工・竹工品（19.2%）」、「人形・こけし（17.5%）」、「貴石細工（16.4%）」となった（図５）。「学んでみたいもの」としては、これまで上位となっていた分野と同分野が多く挙げられていることは全体の傾向と同じであり、あまり変化は見られなかった。学部生の場合も、「知っているもの」（図２）や「見たことのあるもの」（図４）、「使用したことのあるもの」（図４）、「実物を見てみたいもの」（図５）で上位に位置づけられ

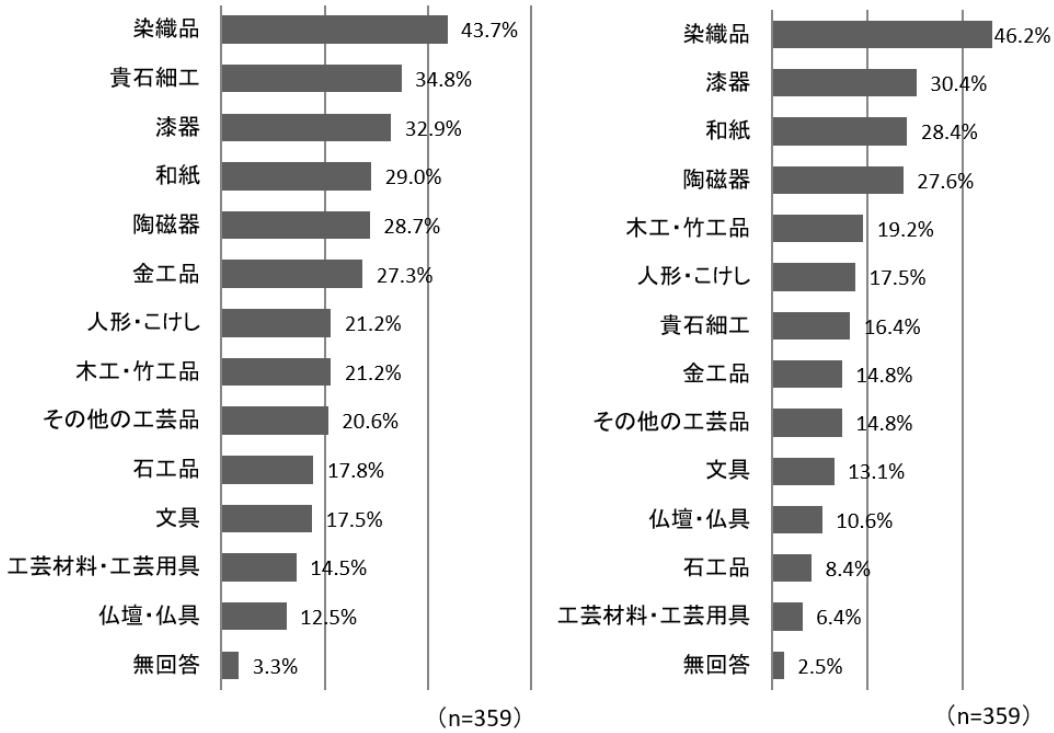


図５「実物を見てみたいもの（左図）」及び「学んでみたいもの（右図）」：複数回答

ている分野が「学んでみたいもの」で挙げられる傾向にあり、知識や経験、好奇心が学ぶ意欲と関連していると考えられる。ただし、「貴石細工」に関しては、知識や経験とは特に関連性はないが、「実物を見てみたいもの」（図５）では上位に挙げられていることから、知識や経験はなくても、好奇心が学ぶ意欲に特に関連していると考えられる。

３）「学んでみたい理由」について

「学んでみたい理由」としては、「新しいことを知ることが楽しい（38.0%）」がもっとも高い値を示し、次いで「美術文化の魅力を知りたい（34.9%）」、「伝統的工芸品の特徴を知りたい（34.0%）」、「価値を理解したい（34.0%）」、「情感豊かな心を培いたい（31.4%）」と続いた（図６）。また、「使い手」と関連する質問項目である「日常生活で工芸品を使用したい（8.6%）」、「美術の働きについて考えたい（11.7%）」、「楽しく豊かな生活を創造したい（18.9%）」等は、学んでみたい理由として高い値を示しておらず、全体の結果と同様に、学部生が自身の楽しさや豊かな心を培うために「伝統的工芸品」について学びたい傾向が明らかになった。特に、「美術文化の魅力を知りたい（34.9%）」、「伝統的工芸品の特徴を知りたい（34.0%）」、「価値を理解したい（34.0%）」、「情感豊かな心を培いたい（31.4%）」、「一般教養として知っておきたい（24.0%）」の値が全体よりも高く示された。なお、「使い手」と関連する「日常生活で工芸品を使用したい（8.6%）」、「美術の働きについて考えたい（11.7%）」、「楽しく豊かな生活を創造したい（18.9%）」は、全体より低い値を示しているため、「伝統的工芸品」と日常生活との接点（つながり）を全体よりも実感していない学部生の実態が浮き彫りになった。また、他者と工芸品を共有したいと考えている学部生は全体と同様に少ない傾向となった。

４）「生活への導入の可否」について

生活の中に「伝統的工芸品」を取り入れたいかという質問に対しては、「取り入れたい」が64.1%であり、「取り入れたくない」が35.9%であった（図７）。全体と比較すると学部生の方が、より「取り入れたい」と考えている傾向となった。６割を超える学部生が取り入れたいと感じていることが示された。「伝統的工芸品」に対して、魅力を感じていた学部生は８割近くで

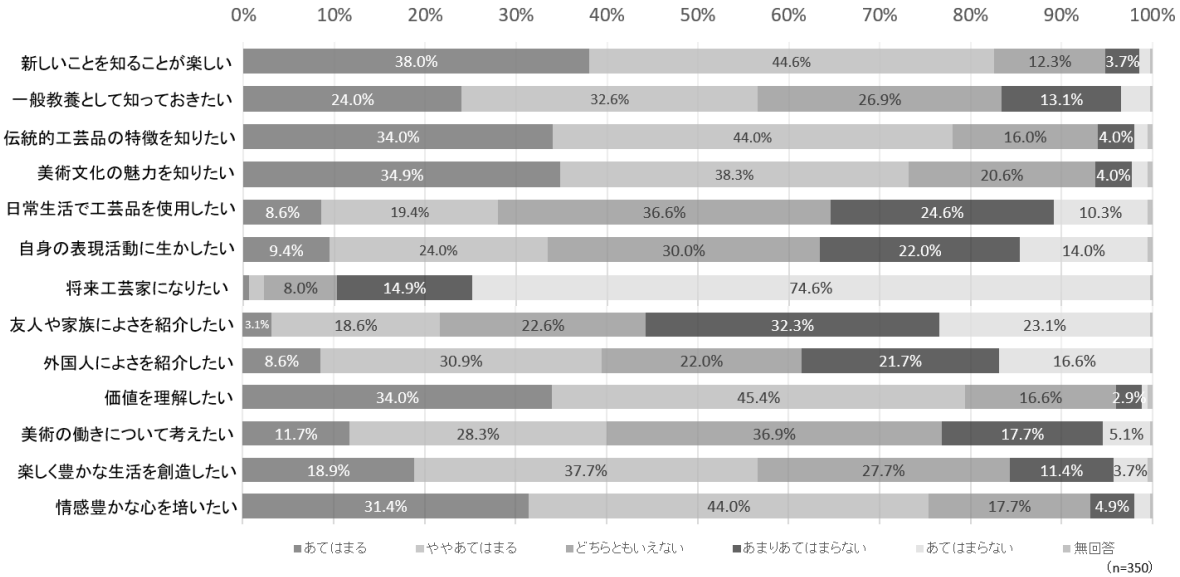


図６　学んでみたい理由

あったが、生活に取り入れたいと感じている学部生は減少する傾向にあった。全体でも同様の傾向がみられたが、学部生が工芸品の「使い手」として、工芸品の魅力を理解できておらず、課題が感じられる結果となった。

５）「生活に取り入れてみたい伝統的工芸品」について

「生活に取り入れてみたい伝統的工芸品」については、「陶磁器（42.6%）」が最も高い値を示し、次いで「漆器（41.7%）」、「染織品（40.9%）」と続いた（図７）。上位の分野は、全体でも同様に、衣食文化と関連した身近なものが挙げられている結果となった[9]。値が高い３項目とそれ以降の項目では値に開きがあるため、衣食に関わる「伝統的工芸品」は「使うこと」と連動しやすく、より積極的に生活に取り入れたいと考える傾向にあるといえる。

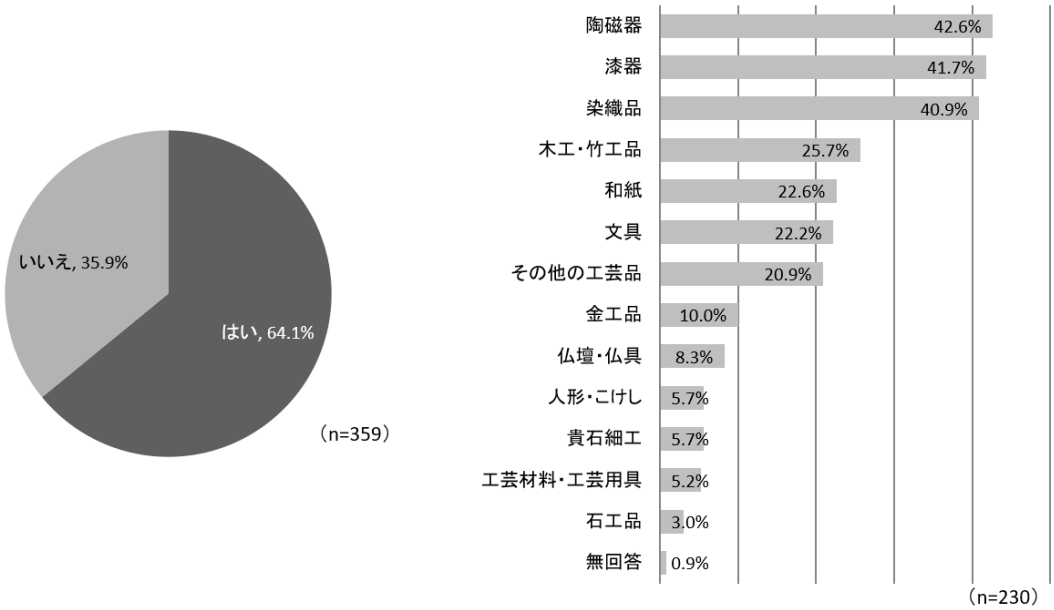


図７　生活に取り入れてみたい伝統的工芸品（右図）：複数回答

６）「５）で重視する視点」について

「生活に取り入れたい伝統的工芸品」に対して 13 項目の視点を示し、その項目をどの程度重視するか（評価）について質問した。評価が高かったのは、「デザインがよい（69.6%）」、「品質がよい（66.5%）」、「材料の質がよい（58.3%）」、「機能性が高い（50.0%）」、「文化的な価値を感じる（47.8%）」、「購入しやすい価格（45.7%）」、「技法に魅力を感じる（44.3%）」であった（図８）。「伝統的工芸品で重視する視点」（図３）について分析した際、全体では「使い手」として「自分にとっての使いやすさ」や「工芸品の背景に込められた普遍的な価値」の両面が重視されており、学部生も同様の傾向であったが、学部生では「工芸品の背景に込められた普遍的な価値」をより重視している結果となった。図３では、「技法に魅力を感じる」も５割を超えており、幅広い視点から伝統的工芸品を価値づけていた。「生活に取り入れたい伝統的工芸品」についても、「使い手」としての「使いやすさ」や「購入しやすさ」等が重視されるとともに、「工芸品の背景に込められた普遍的な価値」や「技法」が評価されており、幅広い視点から伝統的工芸品を価値づける傾向が示された。これは、全体の傾向と同様であった。

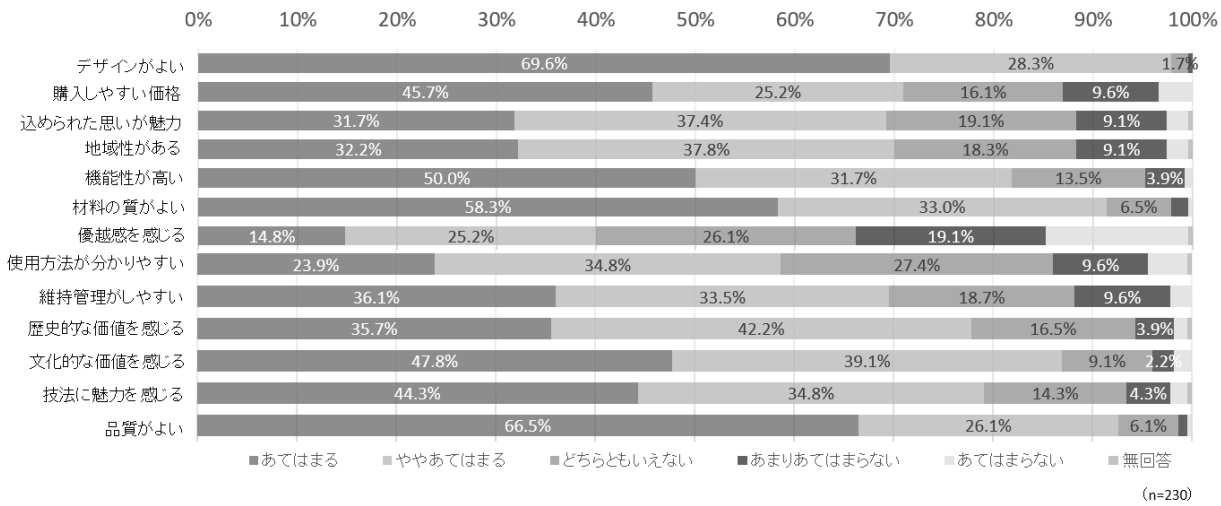


図８　生活に取り入れてみたい伝統的工芸品について重視する視点

７）「伝統的工芸品の所有の有無と購入歴」について

「伝統的工芸品」が自宅に「ある」と回答した学部生は、31.8%であり、「ない」と回答した学部生は 29.5%であった。ただし、最も高い値を示したのは「わからない（38.2%）」であった。「伝統的工芸品」を購入した経験について質問したところ、「ある」と回答したのは 18.7%であり、「ない」と回答したのは 81.1%であった。これは、全体の傾向と同じであった。８割以上の学部生が「伝統的工芸品」を購入したことがないという結果となった。また、生活の中で「伝統的工芸品」に触れたことのあるのは約３割に留まり、約４割は生活の中にある「伝統的工芸品」を意識していない、または判断できない現状であることが示された。

８）「興味等を持つための方法」について

「伝統的工芸品」に興味を持ち、使ってみたい、学んでみたいと感じるために必要だと思うことについて 20 項目をあげて、選択してもらった（図９）。最も必要性が高いとされたのは、「小・中・高・大学での授業の充実（68.2%）」であり、次いで「メディア（TV・ラジオ等）による PR 活動の充実（54.0%）」、「SNS や Twitter 等を活用した情報提供（49.9%）」、「ものづくり体験（ワークショップ等）の充実（48.7%）」、「他分野（ファッション、インテリア、建築等）とのコラボレーション（40.9%）」であった。「伝統的工芸品」について知った方法（図２）として TV や学校での教科（社会科や美術科等）の授業が上位に挙がっているが、この質問においては、教育への期待が最も高い値を示すことになった。この傾向は、全体と同様であったが、学部生の方がより高い値（期待度）を示しているため、「興味を持ち、使ってみたい、学んでみたい」と感じるために、学校教育が果たすべき役割が大きいと感じていることが明らかになった。また、学部生でも「メディアによる PR 活動の充実」や「SNS や Twitter 等を活用した情報提供」が上位にきており、情報の発信方法に注目が集まっている結果となった。さらに、体験活動の充実については、全体よりも高い値を示しており、全体より学部生の方が体験をより重視している傾向となった。

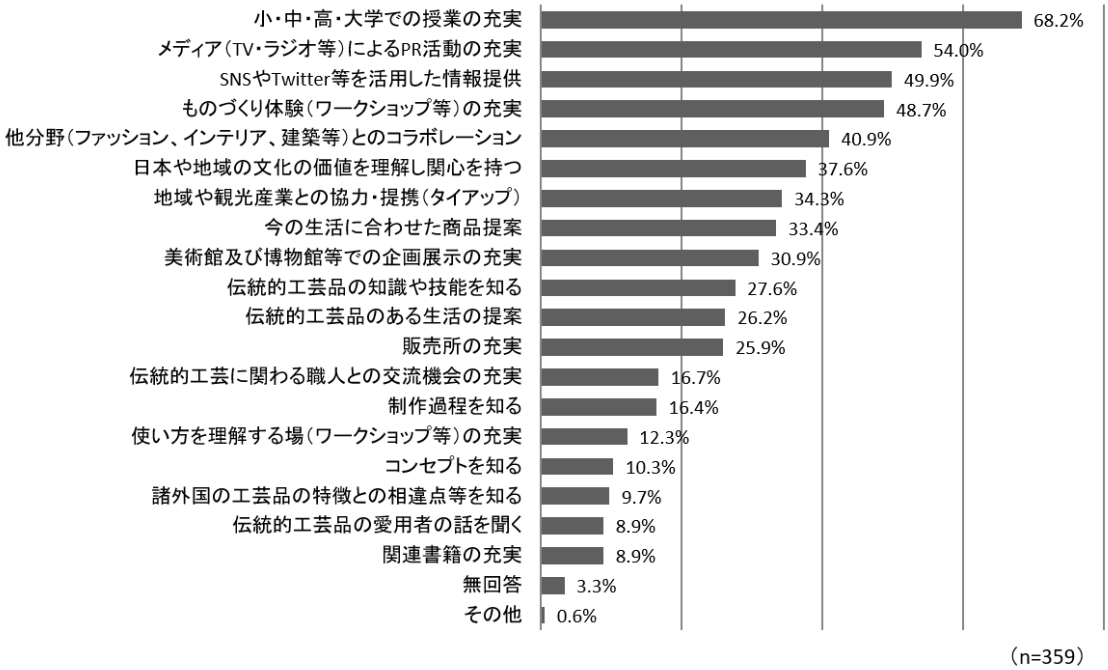


図９　伝統的工芸品に興味等をもつための方法：複数回答

６．まとめ

「伝統的工芸品」を対象とした大学生の意識調査では、大きく「知識等」と「興味関心」の２つの視点を設けた。この２つの視点において、学部生の回答に焦点化して再分析を行った結果、全体との大きな相違点はなく共通の傾向が示されたが、学部生の特徴もいくつか挙げられた。以下に、簡潔に共通点や相違点をまとめる。

「知識等」では、全体と同様に、生活とのつながりが深いものについて知っている傾向にあった。また、「伝統的工芸品」に対して魅力を感じている学部生が大半であるが、全体よりも低い値となり、「魅力を感じない」と回答した学部生も全体と同様にいることが示された。一方で、「伝統的工芸品で重視する視点」については、より幅広い視点から「伝統的工芸品」を価値づけている傾向にあった。また、「伝統的工芸品」を見たことはあっても、使用した経験が少ない傾向にあり、これも全体と同様の傾向であった。出身地の「伝統的工芸品」については、学部生の方がより「知らない」と回答した。さらに、「伝統的工芸品」に対する知識や魅力については、全体よりも学部生の方が低い値を示している項目もあり、課題が残る結果となった。学部生においても、伝統的な工芸品に対する固定的な視点や自己との関連性から工芸品を捉えている傾向にあることも示された。

「興味関心」では、「実物をみてみたいもの」や「学んでみたいもの」については、全体と同様の傾向であった。「学んでみたい理由」については、楽しさや豊かな心を培うこと、文化の魅力を知ること、「伝統的工芸品」の特徴を理解することや価値を理解すること等が挙げられた。一方で、「使い手」に関連する回答については、全体より低い値を示した。加えて、「伝統的工芸品」の生活への導入については、「取り入れたい」と回答した学部生が６割以上であった。しかし、「伝統的工芸品」に対して魅力を感じている学部生が８割近くであったことを考えると、

「取り入れたい」と回答した学部生は減少しているため、工芸品の「使い手」としての意識が低い傾向にあることが示された。購入歴についても８割以上が購入したことがないと回答しており、「伝統的工芸品」と日常生活との接点（つながり）を実感していない学部生の実態が明らかになった。ただし、「生活に取り入れたい伝統的工芸品」で重視する視点では、全体よりも幅広い視点から伝統的工芸品を価値づけていることが示され、これは「伝統的工芸品で重視する視点」と同様の傾向であった。

７．おわりに

前述した結果を、教員養成の視点から考えてみると様々な課題が挙げられる。前報[1]では、アンケート調査を通して、造形・美術教育における伝統や文化（伝統的な工芸品）に関する学習の在り方の検討に向けて、「学校教育における学びの重要性」や「表現と鑑賞を関連させた題材の検討」、「幅広い分野からの題材設定の重要性」が考察された。造形・美術教育における伝統や文化に関する学習の充実のためには、伝統や文化の学びの意義を理解し、題材を検討したり実践したりする力が教員に求められる。伝統的な工芸品を「もの」や「個」の視点のみで捉え題材化するのではなく、自然や人、もの、ことの関わりの中で培われてきた存在であることや現代における工芸の価値等を理解して題材化する必要もある。

調査からは、学部生の「伝統的工芸品」への固定的な視点や知識や興味関心等に関する課題（「使い手」としての視点の低さ等）や特徴が示された。一方で、学びの在り方の手がかりとして「学ぶ意欲と知ること、見たことがあること、使用することとの関連性」や「授業内容及び資料等の教具活用の重要性」、「情報や体験活動の充実」等も示された。

こうした考察内容をもとに、教員養成課程における伝統や文化に関する学びの在り方について、検討していく必要がある。今回の分析では、大学での授業内容が回答に影響を与えたと考えられる項目もあったため、教員養成課程において伝統や文化に関する学びを充実させていくことは喫緊の課題といえる。教員養成課程での伝統や文化の学びの充実が、学校教育における学びの充実につながるものと考えられる。今回の再分析を、教員養成課程での伝統や文化の学習の在り方を検討する一助として、新たなカリキュラムの提案等につなげていきたい。

［謝辞］

アンケートの実施や助言について、佐藤佳代先生（当時、九州産業大学准教授）にご協力をいただきました。調査にご協力いただきましたＡ・Ｂ大学の大学生の皆様、アンケート集計にご協力いただいた村上志穂さんに深謝致します。

註

[1] 髙橋智子「『伝統的工芸品』を対象とした大学生の意識調査－造形・美術教育における伝統や文化に関する学習の在り方の検討に向けて－」大学美術教育学会 美術教育学研究、第 53 号、pp. 137-144、2021

[2] 文化庁、「文化に関する世論調査　報告書」令和２年３月、https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/pdf/92221801_01.pdf（2020 年７月アクセス）

[3] ３つの視点とは、「学校教育における学びの重要性」、「表現と鑑賞を関連させた題材検討の必要性」、「幅広い分野からの題材設定の重要性」である。

[4] 「伝統的工芸品」（230 品目：平成 29 年 11 月 30 日現在）を染織品、陶磁器、漆器、木工品・

竹工品、金工品、仏壇・仏具、和紙、文具、石工品、貴石細工、人形・こけし、その他の工芸品、工芸材料・工芸用具の 13 カテゴリーに分類し示した。

[5] 属性とは別に、質問項目は、「伝統的工芸品」に関する「知識等について」と「興味・関心について」の２つの視点を設定した。「知識等について」の質問には「知っている伝統的工芸品」、「知識を得た方法」、「伝統的工芸品の魅力」、「重視する視点」、「実際に見たことがあるもの」、「使用経験」、「自分の地域の伝統的工芸品に関する知識」の７項目を設定した。「興味・関心について」の質問には、「実物を見てみたいもの」、「学んでみたいもの」、「学んでみたい理由」、「生活への導入の可否と取り入れたいもの」、「生活に取り入れる際に重視する視点」、「伝統的工芸品の所有の有無と購入歴」、「興味等を持つための方法」の７項目を設定した。

[6] 全体では、小中高の教科書や資料集は 26.3%であった。

[7] 前報で既に述べているが、使用方法や維持管理を重視していないという結果は、使用方法や維持管理について理解できてないと考えることもできる。

[8] この傾向は、全体の傾向と同様のものであった。

[9] 全体では「陶磁器（50.3%）」、「染織品（42.3%）」、「漆器（39.6%）」が上位に挙げられた。